第７３回（令和５年７月）文章入力スピード認定試験（日本語）問題

わたしは、人間にとって豊かな食事とはどんなものだろうかと考えることがある。とて 40
も便利な世の中になった現代では、季節を問わずいろいろな食品を気軽に手にすることが 80
できる。また、ほとんどの家には冷蔵庫があるため、日持ちがしないものでも安いときに 120
まとめて買って保存しておくということも可能だ。主食一つとっても、米だけでなくパン 160
やパスタ、うどんなど、多様な選択肢があり、さらにそれぞれの種類も実に多彩だ。こう 200
したメニューが並ぶ食卓は、ある意味とても豊かだといえるのかもしれない。しかし、気 240
が付けばその多くが輸入品だったということも少なくない。 268

国内で消費する食料のうち、どれくらいが国産かということを示す割合のことを食料自 308
給率と呼ぶが、カロリーを基に計算すると、４０パーセントにも満たないというのがわが 348
国の現状だという。これは、先進国の中でも最低水準といわれている。輸入をするには海 388
外との交流や輸送技術などが必要であるため、時をさかのぼっていけばこの割合そのもの 428
は高かったはずだ。そのためわたしは、輸入が盛んになる前の食卓がどのようなものだっ 468
たのか、今と比べて豊かではなかったのか調べてみることにした。 499

ある専門家が、昭和１０年代に近くの店で買ってきた生鮮食品で作った料理は、豊かさ 539
のレベルがかなり高く、自分にとっては理想に近いものだったと述べている。果たして今 579
とどんな違いがあるのだろうか。当時は輸送技術が乏しく、冷蔵庫も普及していなかった 619
ため、地元で育てられた作物や近海で捕れた魚を食べていたといわれている。今ほどでは 659
ないが肉も食卓に上がっていたようで、そのほとんどは国産だったという。家畜にも特別 699
なえさを与えておらず、牧場周辺に自生する草などを食べさせていた。西洋野菜はなかな 739
か手に入らなかったものの、季節によっては現在に負けないほどの生鮮食品が出回ってい 779
た。こう聞くと、今とそれほど変わらないのではないかと思う人もいるかもしれないが、 819
これらのほとんどが自国で産出された食材であったというから驚きである。 854

彼によると、ある時期を境にわれわれの食事が大きく変わったという。それは、戦後の 894
高度経済成長期である。洋食文化が広まったことで肉や油、卵の消費が拡大し、小麦で作 934
られたパンやめんを好む人が多くなっていった。これにより、それまで主食であった米の 974
消費が減少した。外食や安価な輸入品の増加、冷凍食品の普及などもあり、気が付けば日 1,014
本の食料の多くを海外に頼っているという状況に陥ってしまったのだ。この先、何らかの 1,054
トラブルによって輸入が止まってしまったら、われわれの食生活はどうなるのだろう。物 1,094
価が上昇することはもちろん、中には全く手に入らなくなってしまうものもあるといわれ 1,134
る。もし海外で何か起きてしまっても、この生活をある程度維持できるようにするには、 1,174
食料自給率を高める必要がある。旬の農産物や地元で作られたものを選んで、米をメーン 1,214
とした食事を心掛けることが大切なのだという。また、食べ残しを減らすことも、自給率 1,254
アップにつながるそうだ。国産のものをうまく使ったメニューが並んだ食卓こそが、豊か 1,294
な食事だといえるのかもしれない。 1,311

われわれ日本人は一般的に、伝統や昔ながらという言葉に弱いのではないだろうか。慣 1,351
習について親や目上の人に質問したとき、たとえ明確な根拠を説明されなくても、日本で 1,391

は昔からこうだったと聞くと、何となく納得してしまう自分がいる。人間は物心がついたとき、既に生活の中にあった慣習は、ずっと昔から続いているものだと感じやすいが、果たしてそれは本当に古いものなのだろうか。美しい自然や四季に恵まれた日本には、ひな祭りや七夕、お月見など、１０００年以上前から現在まで続く年中行事がたくさん存在する。ところが、それと同じようなイメージを持つものの中には、誕生してから５００年もたっていないものも多いようだ。

わたしが今まで古くから続く行事だと思っていたものの一つに、初詣がある。社寺は古くから存在しているため、とても長い歴史があると思っていたのだが、始まりは１３０年ほど前で、比較的新しい風習なのだ。ただしこれは、わたしたちが正月に家の近くの神社で手を合わせる現在のスタイルの歴史であり、似たような行事はもっと前からあったようだ。例えば、家長がその地域の守り神が祭られている社寺に泊まり込み、大みそかの夜から元日の朝にかけて豊作や家内安全などを祈願する「年ごもり」や、新年の始まりに恵方の方角にある社寺に参拝する「恵方参り」などだ。それらが時を経て、より手軽に実践できるようになったのが初詣だとされている。以前は近所の神社に詣でるのがせいぜいだったものが、明治時代中期の相次ぐ鉄道の開業によって手軽に旅行が楽しめるようになり、御利益があるとされる場所や有名な神社に遠くても足を延ばせるようになった。そこで正月の参拝客を誘引するために、鉄道会社の集客競争が繰り広げられた。その盛り上がりが全国に広まり定着していったというのだ。

日ごろの感謝や、今後の変わらない付き合いを願って年末に贈るお歳暮についても、意外と最近始まったものだという。新年に先祖に供えたものを年の暮れに親戚や近所の人に持っていく古くからの行事が、明治時代以降、上司やお世話になった人にも贈り物をするようになり、それが全国に広まったのだ。他にも、年賀状の起源は１１世紀中ごろだといわれているが、一般市民も気軽に送り合えるようになったのは明治時代初期だという。郵便制度が確立され、はがきの利用が定着したことがきっかけだった。今では当たり前である、お年玉くじが付いたタイプの発売が開始されたのは昭和２４年の出来事で、考案したのは大阪で仕立屋を経営していた男性だという。

では最後に、正座はどうだろう。わたしは幼少期に書道を習っており、礼儀作法の起点で、集中力を高めることができるとして正座をするようにといわれていた。しかし歴史をたどってみると、とても重い着物を身にまとった姫も身分の高い公家も、そして武士でさえあぐらか立て膝だったという。座り方の一つに正座は存在していたそうだが、神仏を拝むときや身分の高い人の前にひれ伏すときに限られていた。足がしびれ、立ち上がるのに時間がかかる正座は、いつでも戦う体勢でなければならない武士には考えられない座り方だったのだ。これがかしこまった場所での座り方となったのは、江戸時代初期以降だとされており、意外と歴史が浅いことを知って驚いた。